定本

横光利一全集

定本

横光利一全集

第二卷

河出書房新社

定本 横光利一全集 第二卷

昭和五十六年八月二十日 初版印刷
昭和五十六年八月三十一日 初版發行

著者 横光利一
校訂者 栗坪良樹
發行者 清水 勝

發行所 株式會社 河出書房新社
東京都渋谷區千駄ケ谷二―三二―二
電話 四〇四―一二〇一（營業）
四〇四―八六一一（編集）
振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷 多田印刷株式會社
製本 小高製本工業株式會社
Printed in JAPAN
© 一九八一

目次

負けた良人 3
冬の女 53
馬鹿と馬鹿 55
表現派の役者 72
慄へる薔薇 102
美しき裏切 121
青い石を拾つてから 128
園 158
一條の詭辯 175
靜かなる羅列 178
街の底 192
壞れた女王 198
妻 202

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ナポレオンと田虫 208
梯子 223
鼻を賭けた夫婦 228
街へ出るトンネル 244
春は馬車に乘つて 279
蛾はどこにでもゐる 298
計算した女 312
青い大尉 335
美しい家 350
花園の思想 356
火の點いた煙草 381
盲腸 400
負けた勝者 403

朦朧とした風 421
擔ぎ屋の心理 439
七階の運動 447
滑稽な復讐 460
皮膚 468
眼に見えた虱 492
名月 523
古い女 529
愛の榮光 535
花婿の感想 550
或る職工の手記 585

参考作品

悲しみの代價　601
愛卷　670
解題　編集ノート　栗坪良樹　711

定本

横光利一全集

第二卷

負けた良人

一

風が闇の中で吹きつけてゐた。外では塀の慄へる音がした。巻き上げられた木片が時々カタツと戸を叩いた。それでも妻は實家へ行くと云つてきかなかつた。もう彼は默つてゐた。二人は外へ出ると、いきなり妻の遲れ毛が風に吹きつけられて斜めに彼女の顏へ吸ひついた。

「ここへ這入つてもいいぜ。」

彼は和解のつもりで妻にマントを擴げてやつた。

「いいわ。」

「さうか。」

また彼は叩かれた。女の子がひとり溝板の上でひよろけてゐた。高い塀の上からアーク燈の強

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

い光りが足元へ斬り込んでゐた。妻はひたひたと打つ髪の毛の下で青白い顔を顰めてゐた。
「ぢや、入れてよ。」と暫くしてから妻は云つた。
愛はもう彼に蹴飛ばされてゐた。しかし、彼はまた默つてマントを擴げてやつた。不意に自轉車が無燈のまま棒のやうに飛んで來た。
二人は曲つた坂を下つていつた。人は通らなかつた。どこかで呼び子の笛が高くなつた。不吉だッと彼は思つた。妻は少し身慄ひをした。坂路は新らしい枯葉と蘗屑の舞踏の他、塵埃は風に吹き拂はれて何もなかつた。
「早く歸るか。」
「ええ。」
樹の梢は塀の上へ突つ伏さうとしてゐた。パッと街の火が明るく見えた。坂路を降り切ると嵐の底で歪んだ街が騒いでゐた。桁の脱れかかつた木橋があつた。橋の下では石垣の下でいつもの濁つた水が暴れてゐた。
「こゝでいいわ。」と妻は云つた。
彼は立ち停つた。彼もここで別れたかつた。「あの本屋の主婦」の方へ行くのもここからだつた。彼の好きなあの本屋の主婦のゐる方へ。——
「ぢや。」
妻は彼の胸の前に立つて暫く彼の顔を窺つてゐた。彼は眼を妻から外らして行手の街角の方を眺めてゐた。

「行つて來てよ。」
「うん。」
妻は笑ひを浮べる努力もせず彼の前から去つた。妻のショールの端が袂と一緒に横に飛ぶやうに靡いてゐた。間もなく妻は橋を渡つて次の街角へ消えて了つた。しかし、彼はまだ立つてゐた。本屋の主婦を見に行くには妻に見られない方が得であつた。淋しい屋臺の店からは暖簾のはためく音がした。街角の塵捨場には塵埃が山のやうに積つてゐた。その山の頂には斜めに竿が刺さつてゐて、濕つた布切れがその竿の尖端を搖つてゐた。ふとそのとき、消えた筈の妻の半身が街角から傾いて彼の方を一寸覗いた。あの妻が暫くの別れを惜しんで、いま一度と自分を見たとは彼には思へなかつた。なほ木橋の欄干に凭れて見てゐると、また妻は「鬼」の來るのを見るやうに、街角からひよツと顏を現はした。彼は恐怖を感じ出した。實家へ行くと云つたのは、それは彼女の嘘なのだ。誰かに逢ひに行くのに相違ない。自分が妻を送る顏をして、實は本屋の主婦を見に行くやうに。彼女が自分の方を覗いたのも、今自分が本屋の方へ行くために、「鬼」を見送つてゐるやうに、彼女も彼女の後を追跡しようとする「鬼」を見屆けたかつたに相違ない。——彼はくるりと自分の家の方へ向き返つた。
「皮肉な奴だ！」

二

彼は本屋の主婦に逢へなかつたと云ふ不滿でひとり自分にぷんぷんと怒り出した。彼の立つて

ゐる眼の前の壁には、彼と妻との幸福な日に二人のために書かれた紙が貼られてあつた。

――ああもろもろの愛よ、汝はいかに麗しく、いかに悦ばしきものなるかな。――

彼は黄色くなつたその紙をひき裂いた。何か代りに自身へ投げつける毒々しい言葉を書いてみたかつた。が、やめた。彼は本屋の主婦に逢ひに行かねばならなかつた。彼女は自分を愛してゐると彼は思つた。たゞさう思ふ方が得策であつたから。彼が彼女に逢つたのは三年も前である。彼は彼女の家の本棚の前で、次の時間に必要な書物を落して來たのに氣がついた。そのとき彼は、「アッ」と小さな聲を上げた。

「どうなさいましたの?」

主婦は坐らうとする膝を延ばして彼に訊いた。それが彼女が彼を知つた最初である。――

彼は時計を出して見た。八時だ。彼が彼女の前へ出て行つて默つて歸つてくるいつもの時刻は今であつた。彼は手首の脈をとつてみた。彼はマントの羽根を首に卷いてまた風の中へ出て行つた。

三

本屋では、店の火鉢を中に挾んで主人と主婦とが坐つてゐた。

「稻妻はまだ出ませんか?」と彼は訊いた。

二人とも默つてゐた。ただ主婦は顏を赧らめて俯向いた。

「變つた!」と彼は思つた。

彼は本棚の前を一廻りした。
「まだ稲妻は出ないのですね。」
主人は火箸をしつかり握つて聞えぬやうに表の方を眺めてゐた。
「ええ、まだでございますの。」と主婦は云つた。
表の硝子戸に風が突き衝つた。主人の火箸が慄へてゐた。
「稲妻はいつ出るんです?」
主婦は彼の眼を避けて一寸口を動かさうとしたがまた默つた。
「もう出るんでせう?」
「ええ。」と主婦は低く答へた。あの主人が恐いのだ。
彼は會釋して外へ出た。出ると、彼はいま一度自分に怒つてゐる主人の前へ引き返したくなつた。
「あなたの奥さんは僕を愛してゐるんぢやありませんよ。僕が愛してるんです。」さう彼は云ひたかつたのだ。彼女を救ふがために。だが、彼はもう行かないと思つた。もう行けないと思つたからだ。彼は道の端に立ち停つてゐた。何物にも怒る理由が何もなかつた。ふと彼は急に故郷(くに)のかん子に逢ひたくなつた。かん子こそ自分を愛してゐたのではなかつたかと彼は思つた。前には彼も彼女を愛してゐた。それに二人は何事も默つて一言の言葉も交へずに別れて來た。
彼は肩で路傍のカフエーの廻轉戸をぐツと突いた。隙間から蓄音機のセレナードが飛び出て來た。

「いらつしやいませ。まアひどい風でございますわね。」
女給は彼の傍へ寄つて來ると大理石の卓子を拭き始めた。カーテンが風でめくれ上つた。彼は默つてメニューの一行を指で叩いた。
「はい。ココア?」
一體、自分は誰をもつとも愛してゐるのであらうかと彼は考へた。と、どこだか戸口のない心の片隅から、妻だと囁くものがある。が、しかし、もしそれが妻であるならば、あの不貞な辰子であるが故に、さう思つたと云ふことがなほ彼には淋しかつた。

四

その夜、彼は遲く歸つた。歸ると、妻は彼より先に歸つて眠つてゐた。彼は妻の寢顏を立つたまま眺めてゐた。
「俺はお前を愛してゐるんだ、だが、お前は俺を愛してゐない。だから俺はお前を愛したくないんだ。俺に放蕩さすのはお前なんだ!」
彼は心を屈して一度抱きたくなつた。しかし彼女は? 彼には妻の寢顏がいつもより美しく見え始めた。と、彼は急に妻を蹴りたくなつた。
「あなた。」と妻は不意に云つて眼を開けた。
彼は默つてゐた。
「私、今夜途中で歸つて來たの。」

「直ぐか？」
「ええ、風があまりひどいんですもの。」
さう云ふと妻はまた眼をつむつた。
「誰と逢つて來たんだ！」と彼は云ひたかつた。が、それは彼自身にも云ふべき言葉であつた。
彼は默つて自分の部屋へ引き返した。
暫くして、彼の後の襖が開くと、
「あなた。」と妻は云つた。
彼は默つて顏を上げた。
「お眠みになつては。」
「お前は寢てればいいぢやないか。」
彼はパイプに煙草を詰めた。
「何を考へてらつしやるの？」
彼は答へなかつた。
「あたし、あなたの考へてらつしやること、知つてるのよ。」
彼は妻の美しさを驗べるやうに顏から足さきの方まで見降した。
「そんなに見ちや、いや。」
妻は彼の傍へ寄つて來て、彼の背中を膝で暖く挾みながら彼に云つた。
「ね、おやすみなさいな。ね、ね。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.